一日一題

ＳＤＧｓ

日本政策投資銀行岡山事務所長　小林　貴史

今回は「ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）」についてです。国連が２０１５年に採択した、30年までに持続可能でより良い世界を目指す国際目標です（17のゴール・１６９のターゲット）。必ず耳にするキーワードです。

岡山に赴任して早々に感じたことは、この取り組みが特に盛んだということです。内閣府認定のＳＤＧｓ未来都市が４自治体もあるほか、「産・官・学・金・言」の各方面の取り組み事例をいくらでも列挙できるほどです。さらに昨年審査員を務めた山陽学園大主催の高校生向け「地域マネジメントコンテスト」では、地域コミュニティーとＳＤＧｓをゲーム感覚で確認する事例がありました。裾野の広さに驚くとともに「誰一人取り残さない」「ボトムアップアプローチ」等のＳＤＧｓ理念に通ずると感じました。

特に印象に残っているのは、昨年12月の「おかやまＳＤＧｓアワード＆フォーラム」です。企業や高校など６団体の表彰とともに、フォーラムでは会場も交えた闊達（かったつ）な議論が展開されました。その中で、会場から受賞した企業に対し「ＳＤＧｓ活動は、利益を生むのか否か」の質問がありました。すなわち、営利追求の活動なのか、または社会貢献の活動なのか、ということです。これは極めて難題と思いました。司会者から私にも話を振られ四苦八苦でした。しかし、改めて考えると、ビジネスか否かの議論の前に、前提材料が整っていないことが課題。つまり、ＳＤＧｓゴールやターゲットに対する企業や個人の活動の定量的・定性的な効果計測が不十分ということが論点と考えました。いわゆる「インパクト評価」のことです。残念ながら、日本を含め世界の機関が、そのロジックモデル（方法論）の確立を目指す途上にあるのが現状です。この解答には研究の帰趨（きすう）をいまだ待つ必要があります。一方、ＳＤＧｓ先進県こその高いレベルでの議論とも感じた次第です。

２０２１・２・10

©山陽新聞社　無断複製転載を禁じます。